

YAMATOZA

大和座
通信
大通

日々新面目

其の十八

安東伸元

「凡(およ)そ人間の事は、

愛(あい)別離(べつり)苦(く)、

怨憎(おんぞう)会苦(えく)、四

苦八苦(しくはつく)、ともにわ

が身に識(し)られて、残る

ところも候(そうら)はず」……

私は長年月、学生達へ能の演劇主題を説明するにあたって、この平家物語の名文を引用して、「この数行の言葉に愛着を覚え、その意味と音感をわが身内にしっかりと取り込む事ができれば、もはや能を知ったと思つてよろしい」などと乱暴な理屈を説いてきました。その思いを新たにさせられるような愛別離苦の訃報が今冬に三つ。冥界へ赴かれたのは、秋浜悟史先生、芦田鉄雄

先生、原口三男氏のお三方でした。一九八〇年から大阪芸術大学へ出講するようになりましたが、その当初より顔面通りの私に変わらぬ厚誼をお示し下さったのが、有名な劇作家であり大阪芸術大学教授の秋浜先生でした。大和座狂言事務所の前身であった「申楽大和座」が大府立文化情報センターで展開していました。「能楽ノート」第四五回公演「演者に聞く」(一九八八年)に、大槻文蔵さんとの対談者としてご出演を要請しました。その中で秋浜先生が締めくくりにおっしゃった言葉、「私たちは希望をもって、芸能人化しない集団として能楽の世界を見ています」が、今も強く記憶に残っています。先生は確か私と同学年であります。七十一歳は何としても早すぎる没です。師走の二十五日、先生の薫陶を受け先生を慕う若い演劇人たちの呼びかけで「秋浜悟史先生を偲ぶ会」が開催されます。芦田鉄雄先生とは一九八六年に京都市立芸術大学でお目にかかりました。先生はオペラの演出に関する講義を担当されていて、新劇活動の傍ら和風オペラの演出も数多く手がけておられました。その幾つかに振り付けなどの手伝いでお呼び頂き、良い体験を沢山得ました。国分寺の稽古場で開催していました月例の研究会にも助力を頂き、その縁で毎年の忘年会には但馬牛のタンをご持参の上前日から泊まり込みで煮込まれる特製のタンシチュウが大評判で、大和座同人や学生達を大いに楽しませました。この数年は病を抱え病魔と付き合いつながら「人間座」の公演、丹波でのオペラ「おさん茂兵衛」の演出に余力を注入された様子でした。とは申せ、ご気力と体力にそれほど陰りを感じなかつた分、七十六歳ではまだまだという思いが強く遣ります。両先生とも通夜に参列しお顔を拝して「さようなら」を申しあげました。十年近い前のある年の師走、忘年会の日に合わせて国分寺の稽古場へ立派な門松が届いた事がありました。送り主は箕面で造園業を営む原口三男さんでした。亡父が生家の国分寺を出る決心をして、兄の住まいする青山台へ移った時から縁あつて植木の世話をお願いしたのが原口さんでした。ついでに私の住む千里山宅も毎年手入れをしていただくことになり、これがきっかけで原口さんは狂言と出会う事になりました。目から鱗が落ちるという言葉があります。初めてご覧になった狂言が原口さんの心を見事にとらえ、それまでの古典芸能に対する印象が一変しました。それより夫人を同伴して、時間の許す限りわれわれの舞台を見て下さいました。そしてお目にかかる度に、これまで偏見によつて近づく事のなかつた古典芸能を知る楽しさを得た事を感じする言葉を熱く語られました。そのお気持ちの現れの一つが我々

を驚かせた松飾りでした。今年十一月のある日、夫人の来訪があり原口さんの訃報が告げられました。持病であった膵臓炎が急変して夏に亡くなられたという事でした。五十九歳とうかがって啞然といたしました。原口さんは大和座の同人の全てに安心と勇気を与えてくださるまさに良い観客でした。遺されたご家族のご無事を祈念し、心からご冥福を祈りたいと思います。さて又今年も、都会では歳末から新春にかけて上・中流層と認知される人達の劇場詣でが多くなります。それを誘う広告情報も満載になります。クリスマスや歳末を謳う大小様々な洋楽コンサートの他、一方、例えば京都南座の顔見世興行などで気分を盛り上げるような古典伝統芸能の新年を寿ぐ数々の公演。和洋取り混ぜ、海外から来演する公演も含めて賑やかな事ですが、その数は相変わらず洋の十に対して和の一という比率に変化はないようです。つまり自国の古典芸能には疎遠や敬遠の立場を持ち、その偏見から意識して近寄らず、西欧古典芸術に依り処を求める事を良しと考える教養人がいかに多いということなのです。この西欧古典文化の紹介宣伝には、文化教養の摂取を是非にと煽り促す芸術の香りが紛々と匂っています。また少数派の国粹民族主義的風様とも感じとれる能楽・文楽・歌舞伎・邦楽・舞踊などの古典伝統芸能情報は故事来歴を

珍重し、その上で十重二十重に仕掛けられた古典的情緒や風情の鑑賞を誘っています。いずれも先進文化国家の選ばれた市民であるために持たねばならぬ教養文化のある事を教えているようです。そして、おおよそ社会的に用意される芸能文化鑑賞の場は、この二様しかないように見て取れます。以前にもこの稿で書きましたが、私は十代の終わりから数年間、歌舞伎と文楽に入り浸りました。この二つの古典芸能は、強烈な芳香を放って私を引きつけました。千日前にあつた歌舞伎座の学割一幕席で実に多くの作品と役者たちを観ました。文楽は四つ橋にあつた文楽座へ学生服のまま通いました。どちらも時には授業をサボってまでして、一人で通いました。歌舞伎の何がこれほどまで私を駆り立てたのでしょうか。貪るように観て知つて後、もうそれ以上心が動かないというところに達して落ち着きました。つまり結果的には歌舞伎の通にもファンにもならなかつたわけです。文楽も同様です。次にのめり込んだ事は映画館通いでした。おびただしい数の洋画を数年間集中的に観ました。一九六〇年前後に輸入された仏・伊・英・米の映画のほとんどを肥後橋の「旧朝日会館」と梅田の「OS劇場」で観ました。初めて聴くシャノンや大編成洋楽の響きとともに、それはめくるめく体験でした。映画に傾注する

きっかけとなつた事の一つは、中学生の頃から私の周りには沢山の岩波文庫本があつて、訳も分からず片端から読みあさつておりましたところ、中にR・ラディゲの「肉体の悪魔」という表題の小説があつて思春期の少年が胸躍らせて読んでいたら、程なくジェラルド・フィリップの主演で映画化された同名のフランス映画が封切りされました事でした。私はこの映画を五度観ています。岩波の文庫本は十一歳上の兄が太平洋戦争敗戦の解放と虚脱の中で日々買い求めてきた古書でした。これのお陰で私の読書歴は専ら翻訳された雑多な西欧文書であつたと言えます。ジャズ喫茶へ日参し、新劇も毎月の労演催を数年観続けました。こつとしてやがてさまざまな遍歴を経て、能・狂言の実演者になる方向に落ち着いて今日に到るわけですが、この右往左往の迷走中に私の感性の底流へ沈積したものが、今も私の一部を支えてくれている事は確かです。さて私は、ここまで書いてきたような若い頃の社会体験をふまえて、一見芸能文化満開の花盛りと見える我が国の現代社会現状を少し占つてみたいと思います。一九六〇年代のあらゆる舞台には、自らが生きる理由を明らかに表明する人間の姿があつたように思います。その姿に接する事、言いかえればその演技者たちが表現する芸に触れて、鑑賞者は心に響く様々な刺激を得る

ことができたように思います。つまり深く感動する事を通して感性、品性、観念などの醸成と錬磨が行われ、ひいては人格形成に多大な影響をもたらせました。実はこれこそ本来の舞台芸術があるべき姿でしょう。ところが今日華々しい舞台芸術の現場に、この姿と芳香をもち、人間を昇華させ鍛える本ものが見あたりません。本物を装ったものはゴマンとあり、その中から選ばれた成功者たちの勢揃いは所詮まがい物の品評会風景に過ぎません。金を惜しまず用意された舞台装置や衣装、趣意書通りに選び出され作り出されたスターたちという図式によつて制作される舞台は、まさに大仕掛けのエンターテインメントです。その上何処かに、定かには見えない黒幕仕掛け人の影も感じられます。そして思惑通りに動員された観客たちが、与えられた目くらましの絢爛豪華さに目を奪われて、感動したような気にさせられています。名題の襲名というものは、或る家の増収を図る興行手段に過ぎない事でしょう。それにわざわざ付加価値を付けるような学問的理屈を評論家や学者先生たちが云々なさる。「良い舞台が良い観客を育て、良い役者は良い客によつて育てられる」という哲理と丁度逆の価値観が渦巻いています。この暮れ、新たに忘れ得ぬ人となられた方たちを追慕してしましたら、このような駄言を書き連ねる事に

なつてしまいました。この一年、私共の催しに足をお運び下さいました方々へ満腔の謝意を表します。皆さんの存在によつて、若い同人たちは明らかに資質を磨かれました。精進の意味を確認いたしました。揺らぎ振れる精神に希望を与え、支えていただきました。山田師久・森五六九・井上放雲・許秀鳳・小田兆紀・金久蒼汲・原斗轟・中西京介・寺西広太に私を合わせた丁度十人、二〇〇六年も「A&Hホール」に腰を据えて、自らの生きる姿勢を問います。生きる上に注意深さ、鋭い洞察、振れぬ信念がいよいよ肝要と思われる世相です。来る年の清安を祈念いたします。(師走三日)



安東 伸元(あんどう のぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。

一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受け「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「二人袴」

もろきゆう

先日、国際交流センターで「コーヒーカップから世界が見える」というワークショップを体験した。コーヒーの歴史について学習した後、各グループでディスカッションをしたが、あまり活発な話し合いとはならなかった。参加者がフェアトレードについて関心の高い人たちだったので、コーヒー豆の生産者が今も植民地時代と同じ様な過酷な条件で働かされていること、国際社会における貿易の不均衡をなくすためフェアトレード商品が増えていることなどを再認識した。しかしそれも多くの参加者が、既に知っていることの確認だったので、新しい発見とはならなかった。

大和座でも以前ワークショップという形式で狂言の仕草を観客の方々に体験していただいたことがある。その時の反省も含めて考えるてみると、次のようなことがわかる。まずワークショップを用いる利点は、「参加型学習なので積極的にものごとを考えることができる」ということだ。講義や講演形式の場合、聴衆はどうしても受け身になってしまふ。だから、話し方によって理解の度合いが異なったり、話し方が単調だとすると眠くなったりする。ワークショップ

プの場合は自ら参加して体験するため眠くなることはない。参加者同士が発言することで気づくことが多く、自らの考え方に改めて気づいたり他人の考え方に気づかされたりする。一方、欠点は今回のような場合だろう。参加者に新しい気づきがなかった場合、ディスカッションをしても何も得るものがなく、時間の無駄だとしか考えられない。つまり、ワークショップ形式に頼りすぎて内容が既に知っていることの再確認だったり、気づくことだけが目的の、答えを出さなくてよいディスカッションになってしまうと、参加者に消化不良の感を与えて終わってしまう。ワークショップというのは手段である。伝えたい事柄を新しい手法によって効果的に伝える方法である。しかし、いかに手法が素晴らしいものであっても、そこに「驚き」と「発見」がなければ消化不良になるのだ。

ところで『総見記』巻一「斎藤山城守富田に於いて対面の事」には斎藤道三が智の織田信長に一度対面したいと申し入れる場面がある。ここには斎藤道三の驚きと発見があった。道三は信長を「類なき大たわけ」と聞いている。その真偽のほどを見極めるため対面を希望し、日時を定め富田で参会することにした。道三は信長が破天荒な人間であると聞き、自らの家来衆は折り目正しく袴肩衣を着用させ信長が通る御堂の縁

に並ばせた。そして自らは町の小家を借り、隠れて信長の様子を覗き見ていた。信長は萌黄の糸で巻いた茶せんつぶり、「湯かた染めの明衣の袖をほつして打著給ふ慰斗付の刀脇指大小共に長柄にてわら縄にて巻せられ太き芋縄の腕抜を付給ふ。腰の廻りには猿引の腰を見る如く燧袋瓢箪以下七つ八つ着けさせらる。虎の皮にて四つ替わりを縫いたる半袴を着し給い」とおよそ儀式には不向きな、というよりは山賊か芸能者のような出で立ちで町中を闊歩した。会場場所の寺に到着するや屏風の内に入り、「御髪おりわけに結せらる。切いつ用意し給ひけん、かちんの長袴をめされ人にしらせず拵え置きし、ちいさ刀の公道なるを、成る程きやしやに指給ひて専ら古風貞真なる御出立ち也。」御家人たちは皆、日頃はわざとたわけて作っているのだと噂しあつたとある。一方、町中で信長の行列を見物していた道三は急いで寺に駆けつけてみると、信長は正式儀礼の装束に身を包んで座している。堀田道空が「是こそ山城守殿にて御座候」と申し上げると信長は「左様にてあるか」と言つて内に入って道三に礼をし、そのまま座敷に直つた。その態度は一人前の大人らしい振る舞いで、盃事も無事済ませた。道三は終始渋い顔つきで、再会の約束をし、帰る信長を二十町ばかり見送つたとある。富田の町中で信長の「大たわけ」

ぶりを確認してもどつた道三の心中は、さぞかし驚嘆に満ちたものであつたらう。織田信長の破天荒ぶりは見せかけで、実は智入りの儀式も、型どおりそつなくこなしてみせる切れ者だつた、ということが道三の発見だつた。

さて、狂言「二人袴」も驚きの狂言である。親子で長袴が一つしかない。親は頼りない息子に付き添つて舅の家に行く。まさか、息子について入つて舅に挨拶をしなればならないとは思っていない。舅の門前まで息子を連れて行き、そのまま帰宅すべきであつた。しかしあまりに幼すぎる息子の身を案じている内に、挨拶をしなればならなくなつてしまった。挨拶をするにも、袴はなし。さてどうするか、この続きは見てのお楽しみ。この後を語るとせつかくの仕掛けを台無しにしてしまう。驚きがあつてこそ演劇をよりおもしろく観ることができ。またそこから、新たな発見があれば古典演劇の存続価値があるというものだ。

了

注 婿入り 「一智入舅入の時、智殿舅殿、たがひに引出物進ぜらるべし。刀計進上するに限たる事にもなし。すべて刀を人の給はりたる時は、さして礼を申事、いつも此の如く有るべし。(中略)一こんと云うは先ず、何にても食物を出して、さて酒を参らせ、次に引き出物進上するなり。」

(「婚礼法式」婿迎之事)とあるように婿入りの儀式の際もつとも重要な儀式は盃事、つまり酒を酌み交わすことであった。



山田 師久(やまだ もろひさ)

大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術プレーン。月例[△]輪讀会[△]の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

落語ブームの背景に

桂吉朝逝去

森五六九(もりごろう)

ちよつとした落語ブーム。このところ私でさえプチ売れっ子気分を味わせてもらっている。高座漬けの毎日。この原稿も巡業に向かう大阪発富山行きサンダーボードの車中で書いている。これを終えると一旦大阪へ戻り小学生の前で演じ、夜は夜間高校の授業で一席。そして又すぐ長野へ走つて、しばらくこんな調子が続いている。前にも書いたように、落語をモチーフに描いたテレビドラマ「タイガー&ドラゴン」の影響も大きい。人気若手俳優らが落語家を演じた。先日もあるところで高座を務めたところ、客席に居合わせた女子高校生とおぼしき子の言うことには「長瀬智也(ジャニーズ事務所)みたいやん。」彼女にすれば私に対する精一杯の誉め言葉なんだろう。喜んでいいやら哀しむべきか。ちよつと複雑である。

我々のように落語家になろうという輩はマスコミで売れる売れないよりもとにかく落語が三度の飯より好きだから入門したという理由が圧倒的に多い。ここが漫才師の多くとちと違つところ。入門時に師匠の多

くは必ずこう言う。「この世界ではまず食われへんで」そんなことは皆、重々承知のうち。私もその一人。高校生時代、落研に所属して高座の味を覚えた。一生こんな事をしていたいと思った。親に押し切られるようにしてとりあえず大学に入学。学科も演芸コースのある大阪芸術大学の芸術計画学科に進んだもの。その一年で中退。後先の事はあまり考えていなかった。とはいえ全く不安がなかった訳ではない。そんな私の気持ちを後押ししたのは新聞のコラム記事だった。「ホームレスの一部に見られる栄養過多から来る成人病」それは料亭やレストランが出す多くの残飯によるもの。かくこの国で何やつたつて飢え死にすることないし、ぐらゐの安易な気持ちがあった。今問題になっているニートののはしりといつていいかも知れない。しかし、ある意味尊敬される存在でないと板(舞台)の上の人間は勤まらない。世間には落語家になりたいたいと思つたものの他の道を余儀無くされた人間は山ほどいる。落語に限らず本当に一番やりたい仕事でなく、夢を諦め別の仕事に就く人は多い。勿論そこにもまた新たな希望や喜びが生まれるものだし、それがかえって功を成す場合も多々あるが、だからといって安易な気持ちで落語家になるのは他の道を余儀無くされた方にも失礼である。

桂春蝶（故）曰く。「お客さんには理屈は要らんけど、わしら（落語家）には理屈が要るんや」何故こう演じるのか。何故笑いが生まれるのか。何故落語なのか。プロと自負するためには最低限の心構えや了見が要る。内弟子時代、師匠の晩酌のお相手をしながら芸論を聞いた日々が懐かしい。内弟子時代は禁酒というのだけが特別辛かったが。試行錯誤の末、大真面目に取り組んでこそお足を頂ける。でないと支払う方に申し訳ないではないか。「やっぱりそれを職業にしている人は違うな」と感じてもらえてこそ出演料というものが派生する。ただの自己表現では成り立たない。桂枝雀師匠（故）は、一般のサラリーマンが朝から晩まで八時間汗水たらして働いてようやくと給料を稼いでいる事に申し訳なく、御本人もそれぐらい稽古されたという話を聞いた。

さて、新聞等で御存じの方も多いと思うが、上方落語界は大きな存在を又ひとつ失った。桂吉朝、享年五十歳。死因は心不全によるもの。昨年から今年にかけて桂文枝、桂文紅、林家染五楼、桂喜丸と落語家の死が相次いでいる。いずれも後進の指導に熱心な惜しむべき師匠、お兄さん方ばかり。お亡くなりになってもう十年近くになる笑福亭松葉兄（七代目松鶴）もそんな方だった。伝承芸能として日本文化として一門に

こだわらずこの道の後進に芸を伝えていくことは落語家の義務とはいえ、それを人一倍務めてこられた方ばかり。今の若手の中でお世話になったことがないという者は一人もおおるまい。なのに・・・価値があるものほど壊れやすいとはこのことでしょうか。落語ブームの背景に諸先輩方の尽力があつたことを忘れてはならない。「落語家は下の者に稽古をつけるがお金を貰うわけやない。それどころか稽古に来たものに飯を食わせ、酒を飲ませて帰す。で、このお返しは稽古をつけてくれた、飯を食わせてくれた酒を飲ませてくれた先輩に返すのではなく、自分がして頂いた同じことを今度は後輩にして返す」のが落語家の流儀。この事で落語はここまで生き残つてこられた。ついでに申し上げると、他所の一門の後輩を可愛がると、今度はその後輩が自分のところの弟子の面倒を見るようになる。「君とこの師匠にはずいぶん面倒見てもうたさかい」てなもん。私などその恩恵にずいぶん与っている。故春蝶のおかげ。だから落語会の前座も世話になった先輩の弟子を優先に使うこともある。また、そうしてきたことで一門という括りだけでなく、落語界という括りが生まれた。一家の繁栄だけ願うのは言語道断。この間、ラジオの落語番組の録音を聞いていると故春蝶がこんなコメントを残していた。「私、松鶴（六代目）

師匠にずいぶん色々言うて頂きましたが、こんな言葉が心に残つてますな・・・己の事しか考えられんような奴は落語家になる資格あらへん・・・くり返し申し上げるが吉朝兄は後進の育成にも随分熱心だった。それに又凄いのは落語だけでちゃんと飯が食えた人。私などは落語そのものよりも落語家の余芸で食うことが多い。だから余計に尊敬と憧れが募る。最後に御会いたのはいつだったか。舞台袖で挨拶すると、いわずらつぱく「よつ、狂言師！」なんて声を掛けてこられた。吉朝兄も大の狂言好きだと聞いているし狂言談義もしたかった。世間にはマスコミに出る頻度だけで芸人の尺度を計る人が多いが、そんな世間に対しても「そうじゃない。ホンマはあれですねん。」と示すことのできる存在だった。東京の古今亭志ん朝師匠がお亡くなりになった時も東京の噺家の多くが、王道、中心を亡くしたショックを感じたと言う。きちんとした王道があつてこそ邪道の生きる術がある。大阪の古今亭志ん朝になつていくべき兄だった。今、ちよつとした落語ブームと言われ、これに乗じて初めて落語に接する人も多かるう。吉朝兄は古典の味を損ねることなく現代の感覚に翻訳できる数少ない落語家の一人。落語の入り口としても最適の人だった。だからこそもう少しだけでも・・・あれだけ落語の間は天才だったの

に、今度ばかりは問が悪すぎる。早すぎませ、お兄さん。・・・合掌。

二〇〇五年十一月十四日(了)



森五六九(もりごろう)

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他、ECCアーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

メソッド考

狂言の台詞術獲得に関する一考察

井上放雲

狂言の台詞。それは極めて音楽的であり、美しく楽しくて心地よい。しかし耳で聴いて心地よく感じたその音楽的な台詞を自分の声で再現しようとする、途端に地獄を見ることになる。巧く再現出来ないのだ。この美しい音楽を自身の身体から自由自在に発するには、自らにいかなる訓練を施せばよいのだろうか？

いわゆる家筋に生まれた、幼少の頃から古典が身近にある環境の人の、伝統的稽古方法については、マスコミによる報道や文献によつて、ある程度知られている。朝から晩までお素人から玄人までの稽古を目の当たりにする事が出来、自身の稽古では余計な事を考えないで、ひらすら師匠が示したお手本を口移しで反復する。少しでも異なった言い回しをしようものなら厳しく叱責され、場合によつては手も飛んでくる、といったイメージだろうか。それはある程度本当であるだろうし、近代的合理主義的な教育を教授することに慣れてしまった私たちが、そこから学ぶ事は少なくないといえる。

しかし、常々私が考察すべきと捉えているテーマは、そういった環境に生まれ育っていない一般の人間、いわゆるレイト・スターターの立場にある者が、学習の力によつて狂言の技術や表現方法や精神構造といったものを、いかに自身の身体に取り込んでいくかを考える、学習方法(メソッド)についてである。

家筋に生まれ、整った環境の中で育つことが圧倒的に有利であることは、間違いない。例えば歌を歌う能力は、俗説では赤ん坊の頃母親が歌ってくれた子守歌の質に大いに左右されるという。要するに母親の歌の音程がズレていたら、子供の音感も、ズレたまま受け継がれるというのである。また科学的に見ても、いわゆる絶対音感(音の高さを他のものと比較によらずに識別する能力)を身につけるのは、4歳から6歳の間にしかるべき訓練を施した場合によつてのみ獲得が可能で、それ以降になると極端に難しくなると言われている。豊かな、あるいは便利な音感を身につけるには、早期教育が重要なポイントとなる。その様な状況において、レイト・スターターが今までの伝統的教育システムにのみ頼つてたなら、どうしてもお素人の域を出られずに終わってしまう可能性がある。後発の人間が本気で古典の音感を身につけるには、少なくとも同じ方法論で取り組んでいてはだめ

なのだ。

ではどこに活路を見い出せば良いのだろう。結論から言えば、私は古典のソルフェージュ力を鍛える事が重要な課題の一つであると見ている。

ソルフェージュとは本来西洋音楽において、ドレミ等の音階を用いて音程感やリズム感、聴音力などを訓練する為の基礎教育の総称である。具体的には、紙に書かれた音符を頭の中で音に変換して声に出してみたり、実際に鳴っている音を正確に楽譜に書き写すトレーニングを行う。この能力は楽器や歌で音楽を表現する際、頭の中でその音楽の設計図を描く役割を果たす。

絶対音感とは4歳から6歳の間にのみ獲得出来ると述べた。しかし古典において重要な能力は、絶対的な音高を識別出来る絶対音感ではない。ある基準を与えられた時にそれを基に相対的に対応・順応出来る相対音感こそが必要な能力なのである。例えば能楽の謡いに、この曲は絶対に四百四十ヘルツのA音から始める、といった決まりごとはない。地頭のその日の調子に合わせて、高めから始めたり、あるいはやや低めから始めたりしても、その高さを基音とした相対的な一定の旋律線を謡う。そしてこの相対的な音感は、幸いな事にある程度歳をとっていても、努力次第で習得することが出来る。ではこれを日本の古典で考え、古典的

なソルフェージュ力を身につける具体的な方法があるのだろうか。

まず狂言の台詞の学び方は、師匠から弟子への口移しが基本である。それは大前提だ。聴いたそのままを忠実に再現できれば、何の問題もない。しかし悲しいかな、古い日本語に対する言語感覚も含め、古典に対するソルフェージュ力が不足していると、次の様な悲劇が襲う。

まず台詞の語句を聴き取れない。

語句の音の高低・イントネーションを真似することができない。

語句の強弱を真似することができない。

台詞が進んでいくテンポ感や緩急を真似することができない。

語句のもつリズム感を真似することができない。

語句と語句の間の間合いを真似することができない。

声の質そのものを真似することができない。……等々。

学習の補助として私たちは師匠から台本を預かり、それを見ながら台詞の勉強をすることが出来るが、台本にはそれら台詞の高低・強弱・テンポ・緩急・リズム・間合い・声質等、狂言の狂言たるもつとも重要な要素がほとんど記されていない。その音楽的な要素の全てのヒントは師匠の示すお手本の中にあり、それは一瞬にして消えて

無くなる「音」として存在する。

台本の台詞を憶える作業自体は本来、憶えの早い遅いに個人差はあれ、また台本の内容や分量によって憶え易さこそ違い、根気よく時間さえかければ、誰にでもそう難しいことではない。しかしほとんどのレイト・スターターは、そのソルフェージュ力の低さから、台本を基にして台詞をインプットする段階で、狂言台詞の音楽的要素を自分勝手にねじ曲げて繰り返し反復してしまいが故に、ますます狂言の本質からかけ離れてしまつ悪循環に陥る。しかもうる憶えの段階で台本を持たずに稽古をすると、言葉の間違いや滅茶苦茶なリズムの掛け合いで台詞を繰り返すうちに間違いをわざわざ身体に埋め込んでしまい、全く逆効果にしかならない。いつぞやの大阪芸大狂言レビューでは、十五分かかる狂言が五分で済んでいた事があった。その学生たちは一生懸命台詞を憶えたのだからうけれど、すると転がるように早口でしか憶えていなかったのだ。

そこで私から、私自身を含めた数多くのレイト・スターターに向けて、台詞術獲得へ向けての提言を試みたい。これは悩める同志たちへの、私からの愛のメッセージだ。

台本をもらって最初の、向かい合つて口

移しに教わる台詞稽古を、まずとにかく一つの基準・正解として身体にたたき込む。ポイントには台本に書かれていない高低・イントネーション・強弱・テンポ感・リズム感・間合い・声質。

一回で憶えられてすぐに再現出来る人はともかく、そうでない人は、録音でも録画でもして、とにかくその基準を百回でも二百回でも聴き込むなりした上、台本に音の高低や強弱・テンポ感・リズム感・間合いなどを書き込めるなら書き込んで、可能な限り「正解」を頭と身体にインプットするべく反復練習をくりかえすのだ。それでも人間は不思議なもので、どうあがいても人それぞれの癖や個性が出てしまつて、狂言本来の正解からずれてしまつことが多い。私はいつも遠慮無く不躰に稽古を録音するが、師匠の手本を聴いて反復した際、今聴いたものをそれをそのまま再現したつもりで短い台詞が、全く再現できていないことを録音で客観的に確認し、愕然とすることがある。というか、いつまで経つても未だその状態だ。自分の「しているつもり」とはそれくらいあてにならないものなのだ。

台詞の口調には、台本の構成や内容に基づき「意味」が込められている。その意味を、台本を客観的に分析する事によって理解を深め、先の口調と照らし合わせてみる。

台本の客観的な分析とその理解の共有は、実は重要な事柄だ。ここは名乗りの部分だから客席に向かつてハッキリ言葉を伝える、ここは場面転換だから気分を変えて、この言葉がキーワードなのでしっかりと、など分析をすればする程、稽古で示してもらつた手本の意味が実感できるようになる。主観的な、一見目新しい独自の解釈は、結局作品を本質から遠ざける小手先の思いつきにすぎない事が多い。正しい答えは「手本」として目の前にあつたのに、この分析の段階でねじ曲がってしまう事も多い。家筋の人たちはそれを恐れ、余計な事を考えさせない教育方法を探る。分析は、国語力に問題があると、諸刃の剣となる可能性を秘めている。正解と意味を常に正確にリンクさせながら、もつとも心地よい音感を探しつつ反復するのである。

正しい口調をある程度再現できるまでは、台本の記憶そのものよりも台詞の音楽性や意味内容の理解を優先する。

台本を見ながらの稽古は、気が乗らない感じがする。しかししつろ憶えでリズム感もテンポ感も無い稽古は、実はほとんど稽古になつていない。

所作も、台詞のテンポ・リズムに乗せてさらう。

台詞が音楽なら、所作はダンスだ。だから小舞がエチュードとして存在するのだ。不思議となかなか頭に入らなかつた台詞も、所作と併せて練習していると、自然に頭の中に定着されてくる。

以上、取り急ぎ現時点における、私の経験に即した後発レイト・スターター向けの台詞術学習方法の提言を述べてみた。伝統的稽古方法の観点からすると、やや邪道な発想によるものもあり、異論のある方もありだろうが、古典が身近にない生活のままに成人してしまつた人間が改めて古典に近づこうとするには、斯くも様々な障害や難しさにもがき苦しんでいるのだという、実態報告となつたと見る事も出来るだろう。さてしかし所詮、舞台芸術はすべて結果論である。私たちの試行錯誤の行く先は、舞台においてご覧になつた方が是と取るか非と感じるか、そこで判断が下されるべきだろう。この上はなるべく多くの方々に我々の舞台をご覧いただいて、厳しくも愛のあるご指導・ご鞭撻を賜りたいと、心より期するところである。

二〇〇五年十二月二日



井上放雲(いのつえ ほううん)

兵庫県生まれ。本名・井上康夫。相愛大学音楽学部卒業、ポーランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内楽グループ『アンサンブル「ベンジエ・ドブジェ」』の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。小田・金久君をはじめ学生達にとっては最適の相談役。相愛大学オーケストラ講師と大阪芸術大学演奏学科オーケストラ演奏要員を勤める。

兆紀探求

「最高の勉強法」

小田兆紀

ここ最近、橋本狂言を楽しむ会、同市子供狂言会、ECCカルチャースクール代講など狂言を人に教える機会に恵まれます。何度も申しておりますが、他者に教える事によってこれまで蓄積されてきた事が整理できる、またはその事で否応無しに整理せざるを得ない状況になる、これまであやふやだった事の再考察など様々な恩恵に預かる事が出来ます。今まで教わっていた立場だった私ですが、逆に人様に教えるというこの上無い勉強の場を与えて頂いております。

前回に引き続き、結果報告のようなものになってしまいましたが、蝶六さんの出講しておられます声優を目指す人の通う専門学校へ代講要員として狂言の講義をする機会を与えて頂きました。本来は落語の実技・理論を本講としていたのですが、台詞を主とした古典という事と、テンポやリズムの伝達、何より声を前に飛ばすという事に関しては狂言が最適との蝶六さんの推薦もあって大和座を代表して私が特別講義という形で出講する事になりました。

私が講義という形態で人の前に立つのはこれが初めてです。何を話し伝え、そしてどの様な流れで90分の講義をするか。何もかも初めての事で、一体何から手をつければいいのか分からなかったのですが、蝶六さんから頂いた概要の中に、「いつも通りで構わない」という一言に後押ししていただきそれならば今まで得て来た事を整理してその中から伝えられる事を伝えようと思ひ立ちました。とはいえどんなに背伸びしても自分自身今まで得て来た事以上の事を伝える事は出来ませんし、といって師匠が常々講義されている内容をそのまま伝えた所でこれも説得力がないでしょう。人に何かを伝える、という事はその伝えたい事が自分の体に入っていないければ言葉として出てきません。そして何より、相手を納得させるという点において言えば借り物の言葉であってはなりません。自身が納得した上で自分の言葉で伝えなければ何の説得力も持たないと思います。今まで含んできた事象を一つ一つきちんと整理して、十分咀嚼しなければ伝える事は出来ないと私は思っています。という事でまずは自分自身の引出しの整理から始めました。今年のテーマは物事の整理でしたので、まさに状況が合致いたしました。そういう準備しているうちにあつという間に当日になってしまいました。

さて、初日。生徒のみなさんは実に素直

で、講義は順調に進みました。講義の内容で特に気を付けた事は、これが古典で御座います、といった世間一般的に見られる古典の非日常的な声や動きといった、もの珍しさだけをそその講義内容にしない、上から物を教えてやると言う形にならない様にした事と、またその逆の不必要に低姿勢で物分りの良い先輩、兄貴分を演じない様にした事です。誇張無しに私が今まで得て来た事、感じた事を真っ直ぐに伝えようと思いました。

講義を通して私がした事といえば、謡「雪山」を謡い続けた事。何故雪山を謡うかその理由、そしてこれを謡える様になるう、という事。狂言台詞の口移し。そして古典の持つ意味や可能性などです。

三回の講義で伝えたい事をきちんと整理し、またその通り出来たと自負しております。何より、こちらで前もって用意しておいた内容を良い意味で対象を見て変更できた事が今回の最大の収穫ではないでしょうか。臨機応変にその場で最適な事を伝える、このあたりはA&Hホールでの司会が役に立ったと言えるでしょう。初回こそ緊張したものの、二回目以降は生徒の熱意と真摯な受講姿勢のお陰で私の中で段々楽しみに変わっていき、あれも伝えたい、これも伝えたいとどんどん内容が膨らんでいき、三回の特別講義はあつと言つ間に過ぎていき

ました。

とは言え、現状ではたった三回の講義だったからこそ成立した、と思わざるを得ません。これが通年だったら、と思うとぞつとします。通年という事は少なくともこれの10倍の回数は授業を展開しないと成り立ちません。という事は当然それだけの材料をあらかじめ用意しなければならぬという事です。与太話や雑談めいた話、業界の裏話などや、前述しました物珍しさだけを刺激する古典の講義をする事に意味はありませんし、そんなものを授業内容として生徒は望んでいません。何より大和座の理念から大きく外れます。授業を受けた人間が少なくとも考えを変える、または触発されてその事象に興味を持つてくれる様な授業、その人間の演技の幅を広げる一助になる授業を展開する必要があります。

声優という職業はある意味で過酷だと思えます。舞台表現者は体という補助媒介（正しくはこちらがメインで声が補助かも知れませんが）があるだけ観客に想像してもらいやすい。もちろんこの様にことは単純ではありませんが、声優業に限って言えば観客、つまり聞き手に伝えられるのはまさに声ひとつ。七色の声、などと称される様に様々な事態を声一つで表現しなければなりません。その演技の幅を広げるのは、その人間の感性。そして今まで得てきたもの

がどれだけ多いか、という事に尽きると思えます。その意味で今回の講義があるのだと言つと生徒のみなさんは納得してくれました。たった三回では何も覚えられない訳が無いと諦めるのではなく、少ない機会でも本気になれば出来ない事は何も無い、自分で知らない内に引いてしまっている限界点の突破、そう言った思考形態に自身を持つていける頭の柔らかさ、自分の可能性を広げる一つの例になるのではないか。みなさんはまだまだ若いので、どうか自分で自分の可能性を潰すような事はしないでいただきたい、いらないと思うものこそ案外芸術には必要だったりするという事、また本当に要るものと要らないものの取捨選択眼、自分の殻に閉じこもらずにもっともったくさんのものに触れ、たくさんのもに興味を示しそれら全部を咀嚼して自分の血肉にして演技の幅を広げていつて欲しいという事を伝えて講義を締めくくりました。

さて、色々申しましたがこれらは全て自分自身に向けられた言葉でもありません。若輩の身ながら、彼らの成功を祈って止みません。そして何より、伝えた事を嘘としないうちに私自身今以上に修練せねばなりません。これからこの様な機会に恵まれる事が増えていくと思えます。その為の準備を今以上に、これから出会うかも知れないまだ見ぬ生徒に対し私が学生時代師匠に

教えて頂いた事を少しずつでもいいから還元していけたらと思います。また、それが芸の伝達であるうと思つています。

本年も早いもので暮れが迫つてまいりました。今年もお運び下さいました皆様、本当に有難う御座いました。また来年舞台でお目に掛かりたいと思います。

完



小田 兆紀(おだ ちようき)

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属し研修を重ねている。二一三年のイラン海外公演に参加、この経験は演劇を目指す人間として自覚を定める開眼脱皮の貴重な経験となった。二一三年以来、橋本市の「市民狂言を楽しむ会」講師をつとめている。

「教育」

金久蒼汲

「今我々は何をすべきか。」大和座の稽古場ではよくこの話題が上ります。表現者にとっては当然考え続けねばならない課題であり、私も常々理想を持ちながら稽古や舞台に臨んでいるつもりです。またこうして定期的に通信の原稿を書かせて頂くことで少しずつ考えをまとめることができ、とても良い勉強になっていきます。しかしいざ人前で話そうとすると、上手く考えがまとまらず言葉に詰まり、日頃の分析や認識の甘さ、危機感の薄さを痛感してしまいません。普段あまり喋る方ではないので喋り慣れないのかも知れませんが、それではいくらか考えがあつても、なかなかそれを相手に伝えることはできません。前号の通信に小田さんが詳細を書いていましたが、この夏から月二回のペースで始まった「橋本ことも狂言教室」で、私はこのことを特に感じています。この教室では小学生に狂言三番と小舞七曲を教えており、私は主に小舞を担当しています。小舞を教えるという点では、大人に教えるのも子供に教えるのも大きな違いが生じてきます。謡の情緒や型の持つ意味などの説明では、大人と同じよう

な表現や言葉をそのまま子供に用いても、子供には理解できないことも多く、当然こちらの意図は伝わりません。子供にも理解してもらえようように言葉を選び、表現を変えらる必要があり。私の頭の中のイメージを一度細分化して、重要な部分だけを選び出し、イメージを崩さないよう注意を払いながら適切な言葉に置き換える作業をしなければならぬわけ。自分が小学生だった頃を思い出しながら、あの頃の自分だったらどんな表現なら理解できていたかを想像しながら試行錯誤しています。なかなか通じ合えないこともありすが、少しずつ理解を深め、最近ではだいたい清々しい反応を示してくれるようになりました。子供は一旦理解すると想像力を一気に膨らませて、格段の上達ぶりを見せてくれます。また上達するに従つて言動や表情にもゆとりが見られ、自分の力でやり遂げる責任感と、それに裏打ちされた自信に溢れた笑顔を見せてくれます。彼らの逡巡のない舞と屈託の無い笑顔を見ると、こちらが恥かしくなるくらい、何とも言えない嬉しさを感じます。この教室が始まった当初は、台詞も動きも舞も謡も完璧に教えて、大人顔負けのものにしてやろうと意気込んでいました。もちろんそれも大事な目標の一つですが、極端な話そんなことは二の次で、今では彼

らが狂言という古典から何を吸収しどう活かすか、また我々はどれだけその手伝いができるかという過程に注目するようになりました。古典はそうした者たちの接近を許し、正しく扱う者には各人に応じた限りない栄養素を与えてくれるものであると、子供たちを通して改めて教えられているように思います。さて冒頭の「今我々は何をすべきか。」の答えですが、様々ある中で一つには「教育」が挙げられるのではないのでしょうか。大和座に集まる仲間たちは、皆どこかで狂言に出会い、安東先生に出会い、大和座の理想に共感して自然と集まっています。特に若い世代にとっては、狂言を武器に自らを確立してこられた安東先生の人生から教訓を得て、自分たちの生きる指針にする絶好の機会を与えていただいています。もちろん安東先生だけでなく、古典に真摯に向き合う大人たちと接することで、これまで考えもしなかった価値観や人生観に触れられることも、私達の人格を形成する上で大きな収穫になっています。そんな大和座の大人たちから得た教訓を、今度若い私達がさらに若い世代に発信できる環境を整えることが、古典を活かすことに繋がるのではないかと思うのです。子供たちを見ていると、大和座の大人たちが私達にそうしてくれたように、私達も子供たちに上手く古典を伝えていけるかという責

任を感じてしまいます。子供狂言教室は十二月の現段階で半分の日程を終えました。残り半分、精一杯彼らと古典と向き合ってお互いの成長を見守りたいと思います。



金久蒼汲（かねひさ そつきゅう）

一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属して研修を積んでいる。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二、三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二、四年インドネシア公演旅行に参加。

大和座狂言事務所関連

催しのお知らせ

一月

八日【日】午後六時 河内長野荘

「大阪府鍼灸師会河南支部新年会」

講話と狂言「神鳴」 非公開

十四日【土】午後二時 浜屋敷

「狂言をあそぼう」

「チエロと能舞・講話」・「太刀奪」

（入場料）一五〇〇円

「お問合わせ」

吹田歴史文化まちづくりセンター「浜屋敷」

〇六 四八六〇 九七三二

十五日【日】午後一時 橋本市教育文化会館

「第一五回 紀ノ川市民狂言会」

「鼻」・「歌唱演習」・「櫛宜山伏」

「お問合わせ」橋本地区公民館

〇七三六 三四 二七五〇

（入場料）無料／要申込

二十二日【日】午前十時 堺能楽堂

「大阪芸術大学舞台芸術学科」

「狂言レビューウ学外公演」

入場歓迎 問い合わせ／大和座

二十五日【水】午前十一時四十五分
 「聖母被昇天学院小学校狂言観賞会」
 「附子」・「講話」・「神鳴」 非公開

一月

十一日【祝】午前十時 山本能楽堂

「艸言会・狂言之会」

(入場料)無料 ご来場歓迎

「お問合わせ」大和座/安東

十八日【土】午前九時三十分 木津町「いずみホール」

「けいはんな狂言親子体験教室」狂言ワークショップ

「お問合わせ」けいはんな文化学術協会

〇七七四 九五 五二一〇

二十二日【水】午後二時

「古典伝統芸能と出会つひととき」その三十九

新シリーズ《室町の民衆像》

「反抗する太郎冠者」

「武悪」演習講話ほか

会場 千里中央「A&Hホール」

(入場料)一五〇〇円

「お問合わせ」A&Hホール

〇六 六八七三 二六〇一

お知らせ

皆様からご要望がありました、A&Hシリーズの夕方
 時間帯公演を二〇〇六年度からおこなうことになりました

た。シリーズは昼の公演を3回、夕方の公演3回、計6
 回おこないます。
 皆様のご来場心よりお待ち申しあげております。

編集後記

今年最後の大和座通信の編集をしながら
 充実感に浸っています。昔の原稿を読み直
 してみました。安東先生が発してこられた
 メッセージは今も昔も変わっていませんが、
 私たちの理解度は昔に比べて高まってきた
 ように思いますし、私が初めて大和座通信
 に投稿した6年程前の原稿と今のを読み比
 べてみますと、以前と比べて、考えに具体
 性が出てきたと思われれます。大和座に集ま
 る若者は、口では上手く表現できない魅力
 に惹かれてやって来ます。そのうち自分を
 捉えている魅力とはなんなのかを考えるよ
 うになり、そして大和座で培われたものが
 自分の人生においてどのような役割を果た
 すのかを考えます。我々にできることは？
 常に自分に問いかけながら答えを見付けて
 いきます。安東先生は大和座の理念ともい
 える、古典伝統芸能の持つ力をいろんな切
 り口で語って下さいますし、山田先生は室
 町の風景をユーモアたっぷりに分かりやす
 く説いて下さいます。蝶六さんは落語、井
 上さんは西洋音楽をもって比較文化論的立
 場で面白い見解を述べて下さいます。小田・
 金久くんは、今まで蓄積してきたものを形

にする段階に入っています。それにつづく
 若手の面々・・・大和座には今、よい風が
 吹いているようです。大和座が一つの軍団
 としてしつかりとまとまりをみせ、その中
 で座員一人一人の色もはっきりしてきたよ
 うに思えます。一人一人が持っている違っ
 た色を武器にしながら、同じものをめざし、
 一つの方向へ向かって力強く進んでいます。
 我々は来年もこの風についでいきます。
 皆さまこの一年間本当にありがとうございました。
 更なる成長を遂げていく大和座
 をどうぞご期待ください。

秀

行日 二〇〇五年 十二月十四日
 編者 許 秀美
 発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

千五六五〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

<http://homepage3.nifty.com/yamatoza>

e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp

